

死にそうになった話

9takaaki

20代半ばから毎年でもないが、6月ごろ体調がおかしくなるような気がする。その日の朝はどうだったのか思えていないけど、なんだかずーっと体がだるかった。頭もボーっとして何も考えたくない。体に力が入らないし、やる気とか気力も全然無くて、ただひたすら布団で寝ていた。おしっこに行きたくなかったけど、とにかく体を動かしたくなくて、ずっと我慢してる。それくらい体がだるかった。我慢できなくなってトイレに行こうと立ち上がったが、フラフラで壁に寄り掛かりながら一歩踏み出すと溜息みたいに息を吐き出し、ゆっくりゆっくり階段を下りた。

なんとか用を足した。布団に寝っ転がってただ時間が過ぎるのを待つしかできなかった。寝ているのか起きているのかもよくわからないまま、夜を迎えた。一日中寝ていたけど、何もできそうにないし夜なので寝ようと思い、ただ目を瞑った。まどろんでいて金縛りにあった。これはよくあることだった。二度寝したときなどはよく体を動かせなくなることがしばしばあったので、またかと思っていたが、息ができない。これもよくあるがなかなか呼吸が戻ってこない。これはやばいかもと思ってなんとか体を動かしたいけど動かせない。苦しい、苦しいと必至になったが、体が動かない。呼吸ができない。そのうち体の感覚が無くなっていく、まず手先足先からの感覚が無くなるというか。スイッチをパチンと切られたようにあったはずのものが無くなっていく。すこしずつ、先端から感覚が無くなっていき下半身が無くなった。お腹が無くなった。腕が無くなった。といったように体がドンドン無くなっていった。そうしてドンドン意識が薄くなっていく。さっきまで苦しいとあせっていたのも消えていく。ドンドン何も考えられなくなって、苦しいや不安や恐怖も消えていく。こうしてドンドン体の感覚がなくなり、意識が無くなってこのまま眠るように消えていくんだなあ。と。さようならと言いかけて、まだ消えたくない。まだ死にたくない。神に願った。お願いお願いと、これが最後だと思って必死に体を動かそうとして、とうとう体を動かせた。ガバッと上半身を起こして息をしていることを確かめ。首を動かせることを確かめ。手を見て、壁を見て、助かったと思った。まだ生きていると思った。しばらく呆然として怖くなり。まずはこのことを紙にメモした。遺書ともとれるようにした。もしかするともうすぐ死ぬのかもしれないという焦りがあったから。

死ぬ瞬間というのは痛いとか苦しいとか怖いとか思っていて死ぬことが恐ろしかった。

しかし、実際には意識が薄れていくと恐怖すらも感じられなくなってしまふ。苦しみも無くなっていった。

何もなくなっていくので不安もなければ安心もないし、後悔もなければ充実もなく

ただ消えていくんだなあということだけが残って最後はさようならとだけ思った。

このことがあってから死ぬことは恐怖ではなくなった。ほんとうに最後はなにも無くなっていくので、

最後の最後は苦しみや痛みや恐怖は無いんだと。